



切腹

HARAKIRI

永田円了

静かな午後、ひとつの屋敷の門が静かに開く。ひとりの浪人が、深く頭を垂れて立っている。彼の衣は擦り切れ、声は低く、しかしどこか揺るぎない響きを持っている。映画『切腹』において描かれるこの場面は、単なる物語の導入ではない。それは、時代の奥底に沈んだ問いが、ゆっくりと浮かびあがる瞬間でもある。

武士とは、何であったのか。名誉とは、どこにあったのか。かつてそれは、命を賭して守るべき誠であったはずである。しかし江戸泰平の世で、その誠は形を変え、やがて形式へと変わっていく。礼は整い、作法は磨かれ、すべては秩序の中に収められていく。だがその整然とした世界の内側で、人の痛みや苦しみは、いつしか見えなくなっていく。主演、仲代達矢が演じる男は、その静かな秩序の中に、小さな亀裂を持ち込む存在である。彼はただ、その身をもって問いを差し出す。形式に従うとは、いったい誰のためなのか。名誉とは、いったい何を守っているのか。その問いは、屋敷の奥深くに響きながら、やがて観る者の内面へと降りてくる。

切腹とは、本来、自己の責任を引き受ける行為であった。しかしこの物語において、それは次第に別の意味を帯びてくる。対面を守るための儀式、秩序を維持するための装置。それではもはや、人間そのものよりも、「そう見えること」が優先される。誠は外に現れる形に置き換えられ、内なる声は沈黙を強いられる。そしてこの問いは決して過去のものではない。時代を超え、形を変えて、今も私たちの中に生きている。



映画『トウキョウソナタ』に描かれるのは、現代の家庭の風景である。そこに登場する父親は、かつての武士とは似ても似つかぬ存在に見える。だが、彼もまた、ある役割を背負って生きている。仕事をもち、家庭を支え、社会の中で「あるべき姿」を演じ続ける存在でもある。

ある日、その役割が崩れる。彼は職を失う。しかし、その事実を家族に告げることができない。なぜならそれは、単に仕事を失うことではなく「自分であること」を失うことに等しいからである。彼は毎朝、同じように家を出る。行くあてもなく、ただ時間をやり過ごし、何事もなかったかのように帰宅する。この沈黙の中に、もう一つの「切腹」がある。

それは血を流すことのない、静かな切腹である。自分の内側にある真実を押し隠し、社会が要求する“役割”を守り続けることで、少しずつ自分自身を失っていく。その過程は穏やかで、外からはほとんど見えない。しかし確かに、人は内側から失われていく。

かつての武士は、外から強制された。現代の私たちは、自ら進んで従っていく。誰に命じられた訳でもないのに、「こうあるべきだ」という見えない規範に縛られている。江戸時代との違いはあるにせよ、そこに流れている構造は驚くほど似ている。

人は、役割として生きるのか。それとも、存在として生きるのか。この問いは、容易に答えの出るものではない。むしろ、生きていく中で何度も立ち返るべき問いであろう。形式は私たちを守る。秩序は安心を与える。しかし、その一方で、形式に従いすぎるとき、私たちは、自分の内なる声を見失う。

静かな問いが残る。もし、何も守るものがなくなったとき、もし、すべての役割が剥かれ落ちたとき、それでもなお残るものを、私たちは「自分」と呼べるだろうか。そして、そのとき初めて、私たちは問われる。

「何によって生きるのか」と。

< 事例 >

映画『切腹』昭和 37 年、仲代達矢主演、形骸化した武士道を斬る
 映画『トウキョウソナタ』2008 年、日本、オランダ、香港合作映画
 映画「13 人の刺客」忠義に生きる武士たち
 新渡戸稲造著『武士道』Bushidou 抛って立つべき“日本の精神”
 司馬遼太郎語る、「名こそ惜しけれ」
 歌・「ミスター・ポー・ジャングルス」仲代達矢兄弟、徹子の部屋より

円了のホームページ: www.enryo.jp

